

新潟県小学校校長会報

題字…今山政二郎氏

発行所
新潟県小学校校長会広報部
新潟市中央区幸西3-3-1
じょいあす新潟会館2階
TEL 025-290-2231
FAX 025-245-6060
E-mail: nksgko@niigata-inet.or.jp
印刷所 株式会社 文久堂
カット…小林 学
(長岡 黒糸小学校)



その時どう動くか

新潟県小学校校長会 副会長 柳 恒雄

今年度の関ブロ神奈川大会の全体会にて、新潟県小学校校長会のこの一年間の取組を二つ紹介した。一つには、政令指定都市への包括的権限移譲に伴い、役員体制を現状維持としながらも、新潟県と新潟市における共通と独自の取組事項を念頭に置いて各部の活動の見直しを図ったことである。二つには、三月末の評議員会で役員及び活動大綱等を議決できるように会則改正を行い、五月の代議員会までの空白期間を解消して、四月初から緊急事態に適時対応できる体制に整えたことである。

さて、二つ目の取組の意義は、幸い年度始めに大きな緊急事態はなかったものの、私たちに「その時どう動くか」といった自問自答が常に求められていることではないだろうか。

最近では、大雨洪水警報と台風接近により、当校が避難所として準備されている中で、明日から二泊三日の佐渡

への宿泊体験活動が実施できるかどうかという判断に迫られた。登山等とは違って、修学旅行的な行事の延期は初めてのことであったが、関係者からこちらの心配を理解していただいた。

また、生徒の死亡事案が続いている中で、ハイリスクな児童生徒に対して家庭と連携を密にしながら見守り体制を整えよ、という県教育委員会からの緊急の指示があった。職員はこの「ハイリスクな児童」をどのように受け止めているのかといった思いがあり、高学年児童全員の保護者と連絡をとってもらった。そのことで、友人関係の悩みを新たに聞き出した例があった。

禅には「而今」という「その時は突然くるのではない。一瞬一瞬が勝負の時という自覚をもって生きよ」との教えがあるそうだ。この自覚こそが「その時どう動くか」の応えにつながるはずである。(魚沼 堀之内小学校)

平成二十九年 度

第一回 県小評議員会 (報告)

日時 六月二十二日(木) 十四時～十六時十五分
会場 上越市「高陽荘」

一 開会の挨拶

大野会長

年間の四分の一が瞬く間に終わり、あと一月で夏休みを迎える。

本日は残りの四分の三の期間の事業推進について先を見通す会合である。

限られた時間ではあるが、各部の事業計画等について協議をお願いしたい。

二 議長選出

神田評議員

三 議事

(一) 報告

1 会務報告

全連小関係・関ブロ関係

3 県小代議員会新発田・胎内・聖籠大会関係

(二) 協議

1 各部の事業計画について

(1) 対策部

丸山理事

「市町村における教育関連予算等に関する調査研究」を市町村教育委員会と校長を対象に実施

各種人的配置人数や特別支援教育の実態等に加え、新規に「外国語科」への取組について調査

(2) 福利部

遠藤理事

給与、処遇改善や再就職・再任用に向けた調査研究活動の推進

イ 福利厚生に係る関係機関・団体との連携や諸活動の充実

(3) 研修部

中澤理事

ア 関ブロ・全連小への大会参加
イ 道徳の教科化に向けた取組をテーマにした地区別研究会の開催

ウ 三委員会の調査研究活動等
エ 広報部

ア 「初等教育」と「校長会報」の発行
イ 調査研究活動報告書の発行
ウ ホームページの運用

エ 全連小広報部との連携
2 全連小佐賀大会・函館大会
関ブロ長野大会

3 平成二十九年要望書の作成
四 連絡

(一) 平成三十年 度県小代議員会
・期日 五月九日(水)

・会場 魚沼市小出郷文化会館
・主管 小千谷市小学校長会

魚沼市小学校長会

(二) 全連小刊行物の案内と購読
(三) 平成二十九年 度日本教育会新潟県支部総会・研修会

・期日 七月八日(土)

・会場 新潟市「じょいあす新潟会館」
・講師 経営コンサルタント

大竹 一雄 様

・演題 「企業に求められる人材」
五 閉会の挨拶 近藤副会長



特別寄稿

教育雑感



一般社団法人 新潟ニュービジネス協議会

会長 佐藤 健之

「学問のススメ」を著した慶應義塾創設者福沢諭吉は彼の論の中で「高等教育を施す事は独裁者を現出させない最短の道である。」と言い切っている。さて、その高い教育とは、何であらうか？

日本の歴史を紐解くと、近代社会の発展をもたらした二つの奇跡に遭遇する。

最初は、徳川幕藩体制から天皇親政への移行である。

封建社会から僅か数十年で欧米と肩を並べるほどの発展を遂げることができたのは、徳川幕藩体制における藩校と寺子屋による教育、世界でも有数の識字力を誇ったこの国の教育力の高さの賜物である。

ただし、俄か大名が如き振る舞いにより、不幸な戦争を招いたのも事実ではあるが。

そして、連綿と続いたその教育力が、戦後焼け野原から立ち上がったこの国を僅かにして世界のGDP第二位の地位に押し上げるといふ第二の奇跡を引

き起こしたのである。

その復興の歴史の中で、何がその原動力となっているかと言えば、ピーター・ドラッカーの言う「イノベーション」と「マーケティング」である。

イノベーションとは何か？

それは常に現状を吟味し、時には否定し、革新を続けることである。

そこにニュービジネス、つまり新規事業が生まれ、そのことにより、今まで存在しなかったマーケットが新たに創造されるのである。

そのためには、どのような教育が必要なのか？

それは、自己独立を導き出す教育力であり、型にはまったものではないはずである。それは、常に問題意識をもつということにはかならない。

しかし、昨今の教育現場を見るにつけ、大胆さと寛容精神が希薄になっていいると思わざるを得ない。

学校のカリキュラムさえきちんとやっていたらOK、そこから逸脱した答えはNOというレッテルを貼る教育で

ある。

ニュービジネスにおける事例を一つご紹介しようと思う。

まさに現代の教育現場から逸脱してしまった若者がいた。

その若者は暴走族にも属しており、高校卒業後は工務店に何とか就職口を見つけて働いていたわけであるが、将来を誓い合った女性と同棲を始めたのである。互いに安い給料であり、結婚式などは夢のまた夢であった。

せめて彼女の誕生日に部屋のカーテンをプレゼントしようと思い、サンプルのカーテンから彼女が喜びそうなものを選び、部屋に付けたのであるが、実際に部屋に飾ってみると想像しているものとはかなり違った色であった。

そこで彼は、部屋のイメージを損なわないよう、サンプルではなく実際の大サイズのカーテンを掲示して販売するカーテン専門店を起業し、大成功を収めることになる。

大胆な着想ゆえの成功例と言える。

現代の教育者は順風満帆に大学を卒業し、社会の経験を積まずに教育現場に入ってくる者が大半ではなからうか。

それは、社会常識の経験がないまま、変化の少ない世界に入ることでもある。いわゆる「ゆでガエル現象」に似ている。

カエルを水の中に入れ、徐々に水からお湯にしていくと、最後には100

度になった段階で死に至る。温度変化に気付かなかったゆえである。

このような状況になる前に気付きを与えることが如何に重要であるかは自明の理である。

多様な生き方を認め、子どもたちが変化に対応できるよう、柔軟に導いていただきたい。そのためにも、教育現場の指導者には異業種の人々と多く交流し、さらに視野を広げていただきたいと願う。

新潟ニュービジネス協議会は全国組織であり、老若男女、全ての方に門戸を開いている。是非ご入会をお勧めするものである。

「種の起源」の著者であるチャールズ・ダーウィンの残した言葉に「この世の中に生き残る事のできる種は、肉体的に優れているものではなく、頭脳明晰なものでもない、環境の変化に対応できる種のみである。」と。まさにこれを教育というのではないだろうか。





長善館の志をもって

新潟県のはば中央に位置する燕市は、信濃川の支流中之口川、西川に沿って

開けた金属洋食器を中心とした金属加工の町として、国内外に広く知れ渡っている。この「つばめ」の地名が歴史上に登場するのは、今から五百二十年前の明応六年（一四九七年）である。白河荘水原条（現在の阿賀野市水原付近）を本拠地とする水原憲家が、嫡子又三郎に五か所の所領を譲っている。その一つに「津波目分」があった。これは、当時の守護代・長尾能景（上杉謙信の祖父）が新たに水原に与えた所領のようである。津波は港をさし、目は中心という意味から、津波目は信濃川を通る舟の着く所であり、近くの村々から米が集まり、舟に積まれていた場所と考えられている。この「津波目」が江戸時代になると、今の「燕」に変化したようであるが、理由は不明である。

燕長善タイム

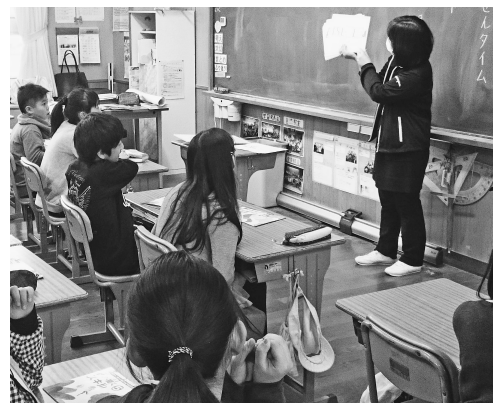
素早く変わる問いの画面。問題に即答する子どもたち。休み明けの月曜日の朝八時十五分、目をこすりながら、気だるそうな顔の子は、教室にいない。一日の始まりから、脳が全力疾走する。

今までの自分の経験にはない朝の教室の風景である。

当市では平成二十三年度から、全小學校で朝の時間に「燕長善タイム」と命名した活動に取り組んでいる。これは、子どもたちの集中力や学習意欲を高め、一日の生活リズムを整える目的で行っている。フラッシュ教材等を利用し、短時間で脳を活性化させる活動や基礎計算や漢字練習、音読などの反復練習の取組が主な内容である。この朝のわずか十五分のおかげで、フレッシュな気持ちで一時間目がスタートしている。市内の保育園や幼稚園、中学校においても内容は違うが、燕長善タイムを実施している。この燕長善タイムの他にも、「長善館学習塾」「長善館若手教師塾」など、「長善館」に由来する様々な教育活動、教育施策が行われ実を上げている。

私塾「長善館」

長善館は、一八三三年（天保四年）、鈴木文臺（ぶんたい）（陳蔵）によって当時の粟生津村（現燕市粟生津）に創設されたもので、明治四十五年までのおよそ八十年続いた私塾である。主に漢学を教え、門弟は四、五十名、多い時には七十名



燕長善タイムの様子

を超えたという。入門者は地域的には西蒲原、南蒲原、三島郡が多く、中には与板藩、村上藩、高崎藩の武士の子弟なども学んでいた。当時の粟生津村は長岡藩に属しており、長岡藩には崇徳館という藩校があったが、この地域から崇徳館で学んだ人はいなかった。幕末から明治にかけて新潟県では私塾が一六七ほどあったが、これらの中で長善館は「都鄙にまれなる塾にして、北越の文化を振興したるもの」として、刈羽の三余堂とともに、明治政府よりその功績を称え表彰されている。長善館で学んだ門人の中から、著名な人物が多数輩出された。長谷川鉄之進らの勤王家、長谷川泰をはじめとする医学科の先達者、小柳司気太らの学者・文人、荻野左門らの政治家である。医学界で活躍した長谷川泰は、安政三年、十五歳で長善館に入門し、その

後江戸での遊学を経て、河井継之助に見いだされ長岡藩の軍医として活躍した。会津・塩沢で戦傷死した継之助に最後まで付き従った。その後、東京大学医学部の前身である第一大学区医学校、明治九年には、自らが医学専門学校である「済生学舎」を創設し、その校長として、西洋医学の医師養成に偉大な功績を残した。野口英世もこの済生学舎の出身であり、長谷川泰の存在が、野口英世の人生に大きく影響していると言っても過言ではない。この小さな村の小さな私塾で学んだ人間が、日本の西洋医学の歴史に大きく貢献していたことは、驚くことであり、誇りに思うことでもある。

塾名の「長善館」は、初代館主の鈴木文臺が、中国の礼記の中の学記篇に出てくる「教也者、長善而救其失者也。」（教なる者は、善を長じて、その失を救う者也）を引用して命名したと言われている。教師に対して「教育は、人の良いところを伸ばし、欠点を補ってやることだ」と教えている言葉である。鈴木文臺の長善館の目的や教育に対する理念を内外に示したものと考えられる。この教えは、現在の教育にも十分通じるものであり、いじめや不登校等、様々な課題が山積する教育の現場で、教師たる者は、改めて「長善救失」という教育の本質に照らし合わせて、考え直す必要があるのではないだろうか。

郡市だより

温かな雰囲気の中で切磋琢磨を

妙高市小学校長会

三年前、国立公園として指定された妙高戸隠連山。個性的な山々が密集し、山麓に点在する高原や湖沼などが一体

となった独特の景観が大きな魅力である。その中心を成す妙高山の麓で、豊かな自然を資源とし、

感動体験や困難な体験などの様々な体験及び協働的な学びを通して学ぶことのよさを実感



できる「ほんもの教育」を実践している妙高市小学校長会。小学校長八名、市立特別支援学校校長一名をオブザーバーとし、計九名で構成している。定例会は年十一回。組織的・計画的に研修や情報交換を行っている。以下、二つの視点から活動内容を紹介する。

一 コンパクトなよさを生かす

全員で九名のコンパクトな校長会である。このコンパクトなよさを生かすという会長の方針の下、一番の特徴は、微に入り細に入り濃密な情報交換ができるということである。それぞれの学校課題、生徒指導上の諸問題等、一つ一つの内容を全員で共有し、胸襟を開いた意見交換をしている。この雰囲気の中で行われる意見交換は、新たな発

想・視点への気付きを生み、有意義である。

今年度は、既に「学校経営ビジョン」「県小学校長会上越大会レポート」について、情報交換や検討会を実施した。円滑な学校運営や充実した研修に向け、適切な準備ができた。

二 機に応じた研修会の実施

「資質・能力の獲得とカリキュラム・マネジメントの充実」「言語活動の充実」「中学校区一取組」これらは今年度計画している研修内容の一部である。新学習指導要領の実施に向けての準備はもちろん、それぞれの学校が直面している課題を取り上げ、必要に応じて外部講師を招聘した研修を実施している。

その他にも、今年オープンの「妙高高原ほっとアリーナ」へ出掛け、見学だけでなく実際に施設を活用してみる、校長それぞれがもつ専門性から学ぶなど、多種多様な研修、教育活動で生かせる研修も当会の特徴である。妙高の豊かな自然の中で、子どもに真っ正面から向き合い、どんな教育活動を仕組んでいくか、温かな雰囲気の中で切磋琢磨している当会である。

学校紹介

児童の主体性と社会性を育む
地域教育プログラムの取組

阿賀野市立笹岡小学校

一 学校の特徴と経営方針

阿賀野市、旧笹神村にある笹岡小学校（全校児童数一七六名）は、四つの小学校が統合し、今年で三十五周年を迎える。豊かな自然と歴史があり、農業と五頭温泉郷などの観光業が中心産業で、家庭・地域ともに学校教育に理解があり、協力的である。

笹岡小の児童はとても素直で、規範意識も高いが、積極性や社会性が十分育っていない傾向がある。そこで、①学習への主体性と②自尊心を高めていく社会性の育成を学校の課題に据え、旧小学校区を代表するコーディネーターでつくる「地域連携推進会議」を組織し、地域とともに学校づくりに取り組んでいる。

二 特色ある教育活動

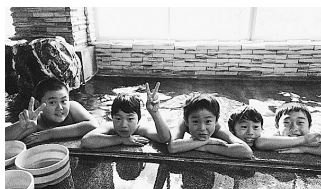
(一) 主体性を育む地域教育プログラム
生活、総合を中心とした六年間の系統的なプログラムを貫くのは「郷土愛の育成」と「キャリア教育の推進」である。児童の学びの場を地域に広げ、「地域への発信・貢献」を学びの成果として目指し、学習を深めている。

例えば四年生は「阿賀野市の湧き水調べ」名水を市民に広めよう」に取

り組んだ。七つの湧き水の特徴（水温、硬度などの水質、味、いわれなど）を調査しまとめた。児童の興味は、湧き水を活用した商品にまで膨らみ、湧き水を使った洋菓子店や蕎麦屋への取材、さらに調理実習まで行った。学びの成果は、校内はもちろん水道局や市役所での発表に加え、県主催の「新潟県の名水の魅力発表会」や阿賀野市の名水PR動画作成と進み、地域のPRに貢献した。

(二) 社会性を育む体験学習の充実

九月に「全校五頭登山」を行っている。全校で縦割り班をつくり、班ごとに全員が頂上を目指し、下山後は地元五頭温泉旅館六か所に分かれ入浴している。五頭山や温泉の歴史の事前学習、登山や入浴のマナーの習得からリーダー指導まで、まさしく総合的な学習である。児童は体験をとおして学び、様々な気付きや自信を得た。そこには教科、特別活動、道徳を横断した充実した学びがある。



温泉で疲れを癒す

習である。児童は体験をとおして学び、様々な気付きや自信を得た。そこには教科、特別活動、道徳を横断した充実した学びがある。